あの頃 アメリカ 17

異邦人こそ国の活力だ

非アメリカ的であることは優れてアメリカ的である。

バラク・オバマ(50)は父親がアフリカ出身で、ハワイに生まれ、少年期にはインドネシアで暮らした。親類には様々な肌の色の人がいて、世界に散らばっている。

イラク戦争に突き進んだブッシュ政権の後、アメリカは変革を求めてついに黒人の大統領を誕生させた。あの時、よその国の事ながら私も感極まって涙が出た。

「非アメリカ的なものを取り込んで活力を生んでいく。常にそう。それがアメリカ」

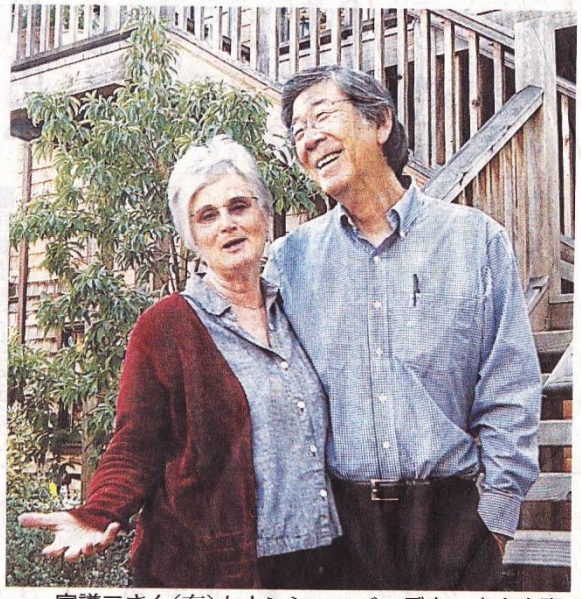
室謙二(66)は、カリフォルニアはバークリーの自宅でそう語った。

移民の国アメリカ。室はその一員である。

元ベ平連(ベトナムに平和を!市民連合)にして、編集者、文筆家、評論家と多彩な顔を持つ室は、1980年代からアメリカに暮らし、市民権を取得して14年になる。

「日米生活対話」の共著がある妻ナンシー・バーデキー(68)はユダヤ系アメリカ人。妊娠、出産、育児に関する新著を準備している。

室は「このあたりは人種も言語も混合。アメリカ人にコンプレックスを持ったことがない」。日本よりも性に合うと言う。「日本の環境にそぐわない」家庭で育ち、異邦人、アウトサイダーの感覚が常にあった。



室謙二さん(右)とナンシー・バーデキーさん夫妻

敗戦翌年に生まれた室は、自分は「レッド・ダイパー・ベイビー」だったと言う。赤いおむつの赤ん坊――共産主義者、社会主義者の子どもというわけで、広くは体制にあらがう人たちの子どもといった意味になるらしい。

母は大阪を出て日本女子大に学び、帰郷せずにそのまま就職した。あの時代に珍しいことだったが、封建的な家族主義を嫌い、見合いなどもってのほかという人だった。

室が小学生の時、韓国人の子と遊んでいたら、近所の人がわざわざ家まで「注意」しに来た。母は室には怒らず、逆にその子と毎日遊ぶよう促した。

後に早稲田大教授を務めた父は英語教師で、戦後は連合国軍総司令部(GHQ)で働き、洋書出版のタトル商会の立ち上げに参加した。日本の軍部は嫌いだったが、東京大空襲の経験からアメリカにもなじまなかったという。

2人は共産党の地下活動家をかくまったことがあった。日本で非日本的であることはそのまま「非日本人」扱いになりかねず、時に命がけを強いられる。「おやじもお袋も根性あるよ」。その両親のもとで、ジャズを聴き、アメリカ映画を見て室は育った。

60年代から70年代にかけてベ平連にいた。ベ平連は、党派によらない市民運動の先駆けだった。

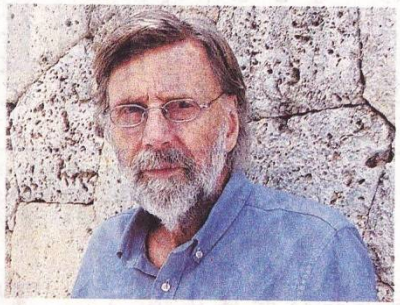
室はアメリカの脱走兵を日本から逃す支援にも加わる。目の当たりにしたのは、自らが信じるアメリカに照らしてベトナム戦争のアメリカに異を唱える人たちだった。非アメリカ的こそアメリカ的――その原体験である。

40年来の友人の政治学者ダグラス・ラミス(75)は、室を「固定観念にとらわれない人」と評す。「ベ平連では政治の話しかできない人がいたが、彼は違った。何でも面白がれる能力がある。政治のことでも興奮するが、料理についても興奮する」

編集者や書き手として、室は「思想の科学」から「ポパイ」まで幅広く手がけた。ポパイでの仕事はベ平連の人から批判もされたが、「あの雑誌にはある種の民主主義が、権威主義の否定があった。アメリカを消費する、自分たちで消費文化をつくっていく。それは新しいことだった」。

室は今、バークリーで本を書き進めている。たとえば最後のヤヒ族インディアンだったイシ。あるいはスペイン内戦で国際旅団にアメリカから参加したジャック白井。そうした非アメリカ的な人物に思いを寄せ、列伝を通して自分の国――アメリカとは何かを考えている。

(福田宏樹)



ダグラス・ラミスさん